

の風俗も糸鬢にしてくりさげ、二筋懸の髻、上髭殘して、袖下九寸に足らず、略下

〔賤のをだ卷〕一義大夫節は、有徳徳川の御代より流行出しといへり、されば豊後ぶしの流弊、次

第に淫風に移りて、遊士俗人の風俗あらぬものに成行て、髪も文金風とて、わげの腰を突立、元結

多く卷て、卷鬢とて、鬢の毛を下より上へかきあげ、月代のきはにて卷こみてゆひたり、

〔我衣〕寶永ヨリ油元結ノ見世多ク出タリ、元祿前ヨリ、元結引有トイヘドモ、買人稀ナルユヘ多ク

ハナシ、

〔倭名類聚抄十四容飾具〕白粉 開元式云、白粉卅斤、俗云波

〔箋注倭名類聚抄六容飾具〕白粉 按陶弘景注本草粉錫云、即今化鉛所作胡粉也、輔仁訓爲波布邇、

則知波布邇即胡粉、釋名胡粉、胡、餽也、脂和以塗面也、者是也、然詳榮花物語所言、波布邇、賤女傳面

者、非上等之品、未知謂鉛粉爲志呂岐毛能、與波布邇同異如何也、又按波布邇、蓋白粉土之義、然開

元式白粉、不得的知粉錫、或是米粉亦未可知也、

〔釋名四首飾〕胡粉、胡、餽也、脂和以塗面也、

〔伊呂波字類抄波雜物〕白粉ハフニ 粉錫楊玄 解錫 胡粉景注 流丹出口 白膏丹口 已上ハ

〔榮花物語十九御裳著〕あやしきさましたる女ども、くろかいねりきせて、はうにと云物ぬりつけて、か

づらせさせて、かささ、せてあしだはかせたり、

〔倭名類聚抄十四容飾具〕粉 文選好色賦云、著粉則太白、和名之

〔箋注倭名類聚抄六容飾具〕粉 急就篇注、粉謂鉛粉及米粉、皆以傳面取光潔也、典藥寮式、供御白粉

料糯米一石五斗、粟一石、然則西土皇國古皆傳面以米粉可知也、所謂之路岐毛能、即是然後世無

著米粉之事、唯有鉛粉、故之路岐毛能轉爲鉛粉之名、今俗謂鉛粉爲於之呂、以是也、但源君所擧之

粉、古之米粉、抑後世之鉛粉、未得其詳、